九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

【寄稿】大番狂わせ！奥田知事誕生

廣崎, 靖邦
博多学園顧問

https://doi.org/10.15017/4491634

出版情報：奥田八二日記研究会会報. 7, pp.323-327, 2021-09-30. 奥田八二日記研究会(九州大学大学文書館内)
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

【寄　稿】

大番狂わせ！奥田知事誕生

廣崎　靖邦

初仕事は屈辱の日記書き

奥田革新県政 3 期 12 年の画期的な時代に、知事は心に残った心証を、毎日の日課として何はさて置き必ずその日のうちに書き綴ったと言う。

私が関わった半年分の日記は就任前からの不祥事でマスコミの標的となり、当時としては間違いなく屈辱に満ちたはずの当選直後の直筆日記である。

その中で私は半年で 14 日分も名指しで攻撃された当時の RKB 県政記者クラブのキャップではあるが、今は反論に先立ち先ずは亡き奥田八二知事に改めて哀悼の意を表したい。

同時に戦友の知事としての当時の心境を忖度しながら、知事対記者として語り継がれた丁々発止の質疑応答がなぜ年末まで半年間も続き、その間個人名ではベスト 5 にも入る 14 回も名指しで私の名前が日記に、時には憎々しく刻まれて来たのか、その時の知事の心境も推測しながら回顧してみる。

世上敵対関係と言われていたがその間我々2 人の心底では週一回の記者会見を通じて徐々にではあるが相互理解が進み、思いやりの気持ちが芽生えて来たことも確かである。

今知事の心情を綴った当時の日記に初めて目を通すが、その行間からにじみ出る知事の複雑な心境が見て取れる。

白亜の殿堂から舞い降りてきた無名の大学教授が生臭い知事の座に座り、日に日に現実味を帯びて行く周囲を観察しながら、さすが知事の椅子を狙った経済学者だけの度胸があるとその使命感と欲望に感じ入ったものでもあった。

ところで一方的な自己検閲だけで毎日の出来事を書き続けたその貴重な日記へ、〃政敵〃と決めつけられ無能呼ばわりまでされた片方の当事者である私に、反論の場を与えてくれた今でも飲み友達で当時の秘書の森山英明氏の思いやりと計らいに感謝しながら、〃後出しジャンケン〃になるが、今では懐かしい思い出となった戦友奥田八二知事のしたたかな日記の一面に記者の本音の視点から迫ってみたい。

屈辱の元凶 RKB 記者廣崎

奥田知事の戦友と自ら名乗った私は、地元福岡の民放テレビ局 RKB の県政記者クラブでキャップを務めていた廣崎靖邦という者で、知事選の直前から RKB の県政キャップに就いたものだが、全社の記者が出席する奥田知事会見では知事の隣がいつの間にか私の指定席となり、これから続く私の在任の半年余りのいわゆる知事と記者との論戦の記者側の切り込み隊長に祭り上げられた。

当時の福岡のテレビ業界はNHKを含めた民放4局が束になってもニュースの表舞台である夕方の視聴率で我が RKB 一社に申し訳ないが遠く及びもつかず、RKB は 20%前後でトップを独走し、まさに視聴率を背に日の出の勢いの発信力を有していた。

もちろん高い視聴率をとるためにRKBは記者全員が常に目的意識を持って目の前のニュースに挑み、更にはその背後に立ちはだかる社会現象とも真正面から対峙した放送局で、他社を圧倒するだけの取材力と人材を備えていた。

権力批判とチェック&バランスがマスコミの使命だけに奥田県政はいきなり選挙違反問題で各社の攻撃に晒され、私の質問は県政の本質に迫り知事の逃げ場を奪い、知事にとっては初日から屈辱の記者会見となり、中でも私とのやり取りでは自尊心を傷つけられたと悔やんでいた模様で、出足から一夜にしてマスコミ嫌いになったと日記にも記されている。

この日から知事と私の因縁めいた会見バトルは熾烈の幕を切って落とされたのである。

スリッパに蹴られた知事の椅子

因縁バトルに入る前、今回の知事選挙をちょっとだけ振り返っておきたい。

5 選を目指した亀井光前知事は、私事ですが私の母校小倉高校の先輩という親しさはありましたが、4 期独裁政権で築いた亀井城は構造上の疲弊が随所で見られ、政策上のスキも長期政権のおごりで目立ち、その横柄さには私も不条理さを感じることもあり、時には先輩知事への苦言を呈したものであるが聞き入れられず、今回の 5 選には少なからず危機感を強めていた。

告示前の情勢は 5 選当確の勢いで独走していたが、選挙戦に入りマスコミも亀井批判の姿勢を強めたこともあり思いの外激戦の様相が強まり、生中継を予定している RKB は入念な情勢分析の結果、当落の分岐点を投票率 75%と定め、これを超えれば浮動票が動き、奥田に当選の目が出ると大胆に予測していた。

県内の選挙ムードは亀井の多選とおごりに批判が高まり、亀井の悲願であった県庁舎と知事公舎の建設が県民感情のアダとなり、最後は分かりやすい知事公舎の 5000 円の高級スリッパが私物化の象徴として命取りとなり、出馬当初は泡沫候補とまで酷評されていた奥

田の下馬評は鰻上りに上り、亀井は投票率 76.5%、得票 1,171,510 票、その差 50,112 票の僅差で無名の学者候補奥田八二の前に屈したのである。

週一知事会見の左隣は廣崎指定席

知事との出会いがいつであったか今ではもう記憶にないが、いずれにしても私は 82 年 1 月に東京支社から異動で本社に帰り、本社では県政記者クラブで 83 年 10 月までキャップを務め、翌 84 年 2 月ソウルの特派員として韓国に赴任し、奥田県政とは 83 年 4 月から 10 月までのわずか半年の付き合いでしかなかった。

記者クラブは毎週火曜日の午前中に定例の知事会見を行うしきたりになっており、記者クラブの隣の記者会見場にまで知事には足を運んでもらうことが慣例となっている。

奥田知事もこれに従い各社の記者連中が密かに特ダネと称して仕掛けた様々な質問の罠の中に初心者で怖さ知らずの勇敢な新知事であったがために飛び込み、今思えば大嫌いなマスコミ連中との週 1 回のこの会見は決して心穏やかなものではなかったはずである。

この知事会見でどういうわけか私がいつも知事の左隣に座りマイク片手に知事に厳しい質問をぶっつける役割を担わせられていた。

知事との対決上私も毎週新たな県政問題を担ぎ出しては知事に投げかけるわけだが、知事周辺の取り巻きからは意図的な学者知事いじめだと非難され私個人は一人〝政敵〟呼ばわりされるまでになった。

しかし私は少数派の革新学者知事だからこそ早く行政になじみ県民の幸せ第一の政治に取り組むべきだとの信念の下、長年の県政記者の経験を生かした立場から革新県政が陥り易い盲点を毎回指摘し、新知事に見識と経験を早く積ませることを目指したのである。

知事日記では 13 回にも渡って私との対決色を露骨に書き綴っているが、それは一つには歯がゆさの素直な本心でもあろうが、もう一つは他人がこの日記の原本を後日見た時、廣崎との対決色に弱気は見せられず強気のポーズを貫き通さねばならない意地の見せ場だったのかも知れない。

その知事の心情を裏付けるような思いもよらない情報が、知事の側近から私のところに寄せられたからである。

中洲の小料理屋で密かに知事と送別会

それは RKB のソウル特派員派遣人事に対して、〝政敵〟とまで呼んだ私に 2 人だけのお別れの場を作ってくれるという内密なお誘いであった。

知事が私のために個別に送別会を催してくれるとは、今までの廣崎憎しは一体何だったのかとまだ疑いたくなる気持ちが強く、私にとってはこの時点では〃事件〃であった。

私のソウル特派員派遣は県庁キャップに就任した時からRKB社内では既定路線であったが、この 10 月まで伏せていたもので、何かのはずみで県の広報課長にこの人事が漏れたことから周りに広まり、それが知事の耳にまで届いたものとしか思えない。

問題はそれに知事が送別会で応じてくれたことである。

表向き我々は県庁内では対決の構図の中の知事と記者との関係であったため毎週の知事と私とのバトル会見は県政の名物として世論の関心も集め、結果奥田県政への注目も日に日に高まり、これに照準を合わせた RKB のテレビの視聴率は安定的な高さを誇っていた。そんな中、知事との意見交換の場も生まれ私の心情にも変化が生じ、それまでの知事の何気ない思いやりの言動に胸襟も開け、親近感も人の情として当然高まって行った。

政治信条は違っても心の通った真剣な言葉の応酬は 2 人の心も近づけ、思いは一つという知事の懐の深さを知ることのできる送別会という事態が現実に起きたのである。

ソウル行きの準備に小忙しく入った 83 年 11 月のある晩、中洲のこぢんまりとした知事好みの料理屋に招かれ、2 人きりでソウルへの旅立ちを祝ってくれたのである。

今でも自慢は奥田知事が私以外の記者とこうした送別会を催した事は他にはあるまいと思うことである。

知事に捧げる私の空言〃政敵こそ真の友人〃は真実かもしれない。

感動！帰国の歓迎会も再び

ソウルから帰任後、間を置かず東京支社への転勤辞令が出たため地元での取材活動はほとんどなかったが、その中でも帰国の報を聞きつけ再び奥田知事から 2 人だけの帰国歓迎の場を催してもらった。

この計らいにも奥田知事の保守系政治家にはないきめ細かい学者知事の人情味を覚え、私の知らない 2 年半の試練を経て、現職知事の進化した姿に「弱さを認めるしなやかさ」を見出し、自分のバトル戦略も無益ではなかったと意を強くしたものだった。

留守中の苦労話にも花が咲き、私の韓国での生の情報にも興味を示し、中でも同じような境遇の反体制派の金大中元大統領への関心は高かった。

金大中氏は当時は亡命先のアメリカから帰国したばかりで自宅軟禁中にも拘らず面会は自由であったが日本の特派員たちは官憲の目を気にして面会は避けていた。

その中で私は金大中氏とは既知の仲でもあったことから日本の特派員としては最も信頼され、週に一回は KCIA（韓国中央情報部）の自宅監視の中、堂々と訪問し、2 人きりで流ちょうな日本語で茶の間談義をしていたことを告げると、奥田知事は大変な興味を示し細

部にわたり質問が来た。

自宅訪問の翌日は恒例だが廣崎担当の KCIA と保安司令部の機関員が私の動向調査のため事務所に現れ、金大中氏の動向をつぶさに聞き取って貴重な機密情報として青瓦台に上げていたそうで、ここでの情報交換が他社の特派員と違う私特有の情報源となった。

私はこの後 86 年 12 月東京転勤となり奥田知事に会う機会はほとんどなくなっていたが、知事の体調が思わしくないことを知り、本社出張時に 2 度ほど天神の済生会に見舞いに伺った。

私の顔を見ると相好を崩して迎えてくれ、やはり知事就任当初の火花を散らしたあのやり取りが一番思い出に残る、と言って手を固く握り締めてくれたのが最後だった。

奥田八二知事！　波瀾万丈の人生お疲れさまでした。ごゆっくりお休みください。

（2021 年 6 月 30 日）